



脳性麻痺児・者のコミュニケーション機能分類システム (Communication Function Classification System; CFCS)



目的

CFCSの目的は脳性麻痺児・者が毎日使っている**普段のコミュニケーション能力**を5つのレベルの一つに分類することです。CFCSは世界保健機構 (World Health Organization; WHO) の国際生活機能分類 (International Classification of Functioning, Disability, and Health; ICF) の中で説明されている活動 (activity) と参加 (participation) に焦点を当てています。

使用方法

対象者の普段のコミュニケーション能力をよく知る親や介護者、専門家がレベルを選択します。成人や青年であれば自分自身の普段のコミュニケーション能力を分類することができるかもしれません。普段のコミュニケーション能力が**全体的に有効かどうか**は、対象者の最大能力ではなく、**コミュニケーションが必要とされる日々の状況にどれくらい参加しているか**ということを踏まえなければなりません。そのような日々の状況は、家庭や学校、地域で起こるでしょう。

普段のコミュニケーション能力がCFCSの2つ以上のレベルに該当する場合は、分類が困難になるかもしれません。そのような場合は、**最も多くの状況で日常的に普段使っているコミュニケーション能力に最も近いレベル**を選択してください。レベルを選択するときは、対象者の知的能力や理解力、動機は考慮しないでください。

定義

コミュニケーションは、**送り手がメッセージを伝え、そして受け手がメッセージを理解したときに生じます。有効なコミュニケーションが可能なのは、場面 (例えば地域、学校、職場、家) や会話の相手、話題などに関わらず、自分自身で送り手と受け手を交互に担うことができます。**

CFCSのレベルを決定する際には、**コミュニケーションの全ての方法**が考慮されます。これらの方法には、話すことやジェスチャー、行動、視線、表情、補助代替コミュニケーション (augmentative and alternative communication : **AAC**) などがあります。AACシステムは、以下に述べるものが全てではありませんが、手話、絵、コミュニケーションボード、コミュニケーションブック、会話装置 (携帯用会話補助装置 (voice output communication aids : VOCAs)) や音声出力装置 (speech generating devices : SGDs)) と呼ばれるものなどがあります。

レベル間の区別は、**送り手側と受け手側のパフォーマンス、コミュニケーションのペース、誰が会話の相手なのか**ということを踏まえて行います。この分類システムを使うときは、以下に示す定義に留意してください。

有効な送り手と受け手は、メッセージの発信と了解を交互にすばやく、かつたやすく入れ替わりません。誤解の明確化と修正のために、有効な送り手と受け手は、メッセージをくり返したり、言い換えたり、平易にしたり、詳しく述べたりという方略を使ったり求めたりするでしょう。コミュニケーションのやり取りをスピードアップするために、特にAACを使うときは、効率的な送り手は親しいコミュニケーションの相手に対して、言葉の省略や短縮によって文法的には正しくないメッセージを使うかもしれません。

コミュニケーションの**快適なペース**とは、いかにすばやく、かつたやすくメッセージを発信と了解することができるか、ということです。快適なペースではコミュニケーションの失敗はほとんど起きず、コミュニケーションのやり取りの中で間ができることがほとんどありません。

馴染みのない会話の相手とは、見知らぬ人もしくは時折しかコミュニケーションを取らない知り合いのことです。身内、介護者、友達のような**馴染みのある会話の相手**は、以前から知っていることや経験によって、より有効なコミュニケーションを取ることができるかもしれません。



説明

- ★ CFCSレベルを決定するとき**検査をする必要はなく**、標準化されたコミュニケーション評価に置き換えられるものでもありません。CFCSは検査ではありません。
- ★ CFCSは、今現在実際に使っている普通のコミュニケーション能力の**有効性によってグループ分けします**。認知や動機、身体、話すこと、聴覚、言語の問題などが実際どれくらい影響しているかという**潜在的な原因を説明するものではありません**。
- ★ CFCSは**個々の向上する可能性については評価しません**。
- ★ CFCSはコミュニケーション能力の有効性を分類することが重要な**研究やサービスの実施に役立つ**でしょう。

例えば

- 1) 普段使っているコミュニケーション能力を専門家と専門家ではない人の中で共通の言葉で説明するとき。
- 2) AACを含む全ての効率的なコミュニケーション方法を使用するとき。
- 3) 異なるコミュニケーション環境や相手、コミュニケーション課題がどれくらいレベル選択に影響を与うるか比較するとき。
- 4) 実際のコミュニケーション能力を向上するためのゴールを選択するとき。

- ★ 5つのレベルの説明は3ページをみてください。
- ★ レベル間を区別するのに参考になる図は4ページをみてください。
- ★ よくある質問はCFCSのウェブサイトに掲載しています。
<http://cfcs.us>

コミュニケーション方法

使用するコミュニケーション方法の数は問いません。**普通のコミュニケーション能力全体を一つのCFCSレベルに決定します**。使用するすべてのコミュニケーション手段を下記に示しています。

個々に使用される**コミュニケーション手段**は下記の通りです。
(当てはまるもの**すべて**にチェックしてください。)

- 言語
- 発音 (相手の注意を引くための「あーうー」のような発声など)
- 視線や、表情、ジェスチャー、指差し
(例 体の一部、棒、レーザー) など
- 手話
- コミュニケーションブックやコミュニケーションボード、絵など
- 会話装置、音声出力装置
- その他

CFCS 開発に関する参考文献 :

Hidecker, M.J.C., Paneth, N., Rosenbaum, P.L., Kent, R.D., Lillie, J., Eulenberg, J.B., Chester, K., Johnson, B., Michalsen, L., Evatt, M., & Taylor, K. (2011). Developing and validating the Communication Function Classification System (CFCS) for individuals with cerebral palsy, *Developmental Medicine and Child Neurology*, 53(8), 704-710. doi: 10.1111/j.1469-8749.2011.03996.x, PMC3130799.

日本語版 : 清野緒珠 Tsugumi Seino, PT, MSc、西部寿人 Hisato Nishibu, PT, MSc、樋室伸顕 Nobuaki Himuro, PT, PhD
日本語版の問い合わせ先
〒060-8556
札幌市中央区南 1 条西 17 丁目
札幌医科大学医学部公衆衛生学講座
樋室伸顕 (himuro@sapmed.ac.jp)

脳性麻痺児・者のコミュニケーション機能分類システム (Communication Function Classification System; CFCS)

凡例	
P	脳性麻痺児・者
U	馴染みのない相手
F	馴染みのある相手
—	有効である
.....	あまり有効でない

I. 馴染みのある相手、馴染みのない相手どちらも有効な送り手であり受け手である。

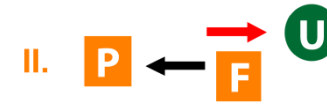
多くの場面でほとんどの人と自ら交互に送り手側と受け手側になることができます。会話の相手と馴染みがあってもなくとも簡単かつ快適なペースでコミュニケーションがとれます。コミュニケーション上の誤解はすぐに修正され、全体的なコミュニケーションの有効性に影響しません



レベルIとレベルIIの違いは会話のペースです。レベルIの場合、理解すること、メッセージを構成すること、あるいは誤解を修正することは、ほとんどあるいは全く遅れることなく快適なペースでコミュニケーションを行います。レベルIIの場合、少なくとも時には多くの時間を要します。

II. 馴染みのある相手と馴染みのない相手どちらもゆっくりではあるが有効な送り手や受け手 (両方もしくは一方) である。

ほとんどの人とほとんどの場面で、自ら交互に送り手側と受け手側になれますが、会話のペースはゆっくりであり、コミュニケーションのやり取りはより困難になるかもしれません。メッセージの理解や構成、誤解の修正に多くの時間を要するでしょう。コミュニケーション上の誤解はその都度修正されるので、会話の相手が馴染みのある人でもない人でも結果的に有効性を損なうことはありません。



レベルIIとレベルIIIの違いは、ペースや会話する相手のタイプです。レベルIIの場合、全ての会話の相手に対して有効な送り手であり受け手となりますが、ペースが問題となります。レベルIIIの場合、馴染みのある会話の相手に対して一貫して有効ですが、馴染みのない相手の場合はその限りではありません。

III. 馴染みのある相手とでは、有効な送り手であり受け手である。馴染みのある会話の相手であれば (馴染みのない相手ではない)、ほとんどの場面で交互に送り手側にも受け手側にもなれます。

馴染みのない相手とのコミュニケーションは、一貫して有効ではなく、馴染みのある相手とは概ね有効です。



レベルIIIとIVの違いは、馴染みのある相手との間で送り手側と受け手側の入れ替わりが終始一貫して行えるかどうかです。レベルIIIの場合、送り手としても受け手としても、馴染みのある相手とコミュニケーションを全般的にとることができます。レベルIVの場合、馴染みのある相手とも一貫してコミュニケーションを取れません。この困難さは、送り手や受け手 (両方もしくは一方) として起こるかもしれません。

IV. 馴染みのある相手とでも一貫性のない送り手や受け手 (両方もしくは一方) である。

一貫して交互に送り手側と受け手側になることができません。この一貫性のなさは、以下のような様々なタイプとして見られるでしょう。a) 場合によって有効な送り手と受け手である、b) 有効な送り手だが受け手としては制限がある、c) 送り手としては制限があるが有効な受け手である。コミュニケーションは馴染みのある相手に対してであれば時として有効です。



レベルIVとレベルVの間の違いは、馴染みのある相手とコミュニケーションを取るときの困難さの程度です。レベルIVの場合、馴染みのある相手と効率的な送り手や受け手 (両方もしくは一方) として時々成功します。レベルVの場合、馴染みのある相手ですさえ有効なコミュニケーションが取れることは滅多にありません。

V. 馴染みのある相手とも有効な送り手や受け手になることは滅多にない。送り手としても受け手としても双方に制限があります。

このレベルの人のコミュニケーションは、ほとんどの全ての人にとって理解することが難しいです。ほとんど人からのメッセージを理解する事に制限があるようです。コミュニケーションは馴染みのある相手とであってもほとんど有効ではありません。





CFCS レベル分類チャート

